

# 十 如 是 事

正嘉二年 三七歳

我が身が三身即一の本覺ほんがくの如来にてありける事を今の經に説いて云はく「如是相 如是性 如是体 如是力 如是作 如是因 如是縁 如是果 如是報 如是本末究竟等」文。初めに如是相とは我が身の色形に顯はれたる相を云ふなり。是を応身如来とも、又は解脱げだつとも、又は仮諦けたいとも云ふなり。次に如是性とは我が心性を云ふなり。是を報身如来とも、又は般若はんにゃとも、又は空諦くうたいとも云ふなり。三に如是体とは我が此の身体なり。是を法身如来とも、又は中道ちゆうどうとも、法性ほっしょうとも、寂滅じゃくめつとも云ふなり。されば此の三如是を三身如来とは云ふなり。此の三如是が三身如来にておはしましけるを、よそに思ひへだてつるが、はや我が身の上にてありけるなり。かく知りぬるを法華經をさとれる人とは申すなり。此の三如是を本として、是これよりの残こりの七つの如是出はいでて十如是とは成りたるなり。此の十如是が百界にも千如にも三千世間にも成りたるなり。かくの如く多くの法門と成りて八万法蔵と云はるれども、すべて只一つの三諦の法にて三諦より外には法門なき事なり。其の故は百界と云ふは仮諦なり、千如と云ふは空諦なり、三千と云ふは中諦なり。空と仮と中とを三諦と云ふ事なれば、百界千如三千世間まで多くの法門と成りたりと云へども唯一つの三諦にてある事なり。されば始めの三如是の三諦と、終はりの七如是の三諦とは、唯一つの三諦にて始めと終はりと我が一身の中の理にて、唯一物にて不可思議なりければ、本と末とは究竟して等しとは説き給へるなり。是を如是本末究竟等とは申したるなり。始めの三如是を本とし、終はりの七如是を末として、十の如是にてあるは、我が身の中の三諦にてあるなり。此の三諦を三身如来とも云へば、我が心身より外には善惡に付けてかみすぢ計りの法もなき物を、されば我が身やがが頓て三身即一の本覺の如来にてはありける事なり。

是これをよそに思ふを衆生とも迷ひとも凡夫とも云ふなり。是を我が身の上と知りぬるを如来とも覺りとも 聖人さととも智者とも云ふなり。かう解り明らかに觀ずれば、此の身頓て今生の中に本覺の如来を顯はして即身成仏言とはいはるゝなり。譬へば春夏田を作りうへつれば、秋冬は蔵に収めて心のまゝに用ふるが如し。春より秋をまつ程は久しき様なれども、一年の内に待ち得るが如く、此の覺りに入りて仏を顯はす程は久しきやうなれども、一生の内に顯はして我が身が三身即一の仏となりぬるなり。

此の道に入りぬる人にも上中下の三根こんはあれども、同じく一生の内に顯はすなり。上

根の人は聞く所にて覺りを極めて顯はす。中根の人は若しは一日、若しは一月、若しは一年に顯はすなり。下根の人はのびゆく所なくてつまりぬれば、一生の内に限りたる事なれば、臨終の時に至りて諸もろもろのみえつる夢も覺めてうつゝになりぬるが如く、只今までみつる所の生死妄想の邪思ひがおもひ、ひがめの理はあと形もなくなりて、本覺のうつゝの覺りにかへりて法界をみれば皆寂光の極樂にて、日来賤ひごろいやしと思ひし我が此の身が、三身即一の本覺の如来にてあるべきなり。秋のいねには早わせと中なかと晩おくとの三つのいね有れども一年の内に収むるが如く、此も上中下の差別しゃべつある人なれども、同じく一生の内に諸仏如来と一体不二に思ひ合はせてあるべき事なり。

妙法蓮華經の体たいのいみじくおはしますは、何様いかようなる体にておはしますぞと尋ね出だしてみれば、我が心性の八葉はちようの白蓮華にてありける事なり。されば我が身の体性を妙法蓮華經とは申しける事なれば、經の名にてはあらずして、はや我が身の体にてありけると知りぬれば、我が身頓やがて法華經にて、法華經は我が身の体をよび顯はし給ひける仏の御み言ことばにてこそありければ、やがて我が身三身即一の本覺の如来にてあるものなり。かく覺りぬれば無始より已来、今まで思ひならはしゝひが思ひの妄想は、昨日の夢を思ひやるが如く、あとかたもなく成りぬる事なり。是を信じて一遍も南無妙法蓮華經と申せば、法華經を覺りて如法によほうに一部いちぶをよみ奉るにてあるなり。十遍は十部、百遍は百部、千遍は千部を如法によみ奉るにてあるべきなり。かく信ずるを如説修行の人とは申すなり。南無妙法蓮華經。

日 蓮 花 押